

**短報 研修会の企画運営を通じた地域運営組織づくりへ向けた
課題解決のためのポイント整理・共有の取組み（Ⅱ）**

－「みんなで地域組織づくりを考えよう」研修における課題相談ワークショップをととして－

吉田 翔・中曾 さゆり・笹田 敬太郎・青西 靖夫

島根県中山間地域研究センター研究報告第14号別刷

平成30年11月

短報

研修会の企画運営を通じた地域運営組織づくりへ向けた 課題解決のためのポイント整理・共有の取組み（Ⅱ）

—「みんなで地域組織づくりを考えよう」研修における

課題相談ワークショップをとおして—

吉田 翔・中曾 さゆり・笹田 敬太郎・青西 靖夫

Activity that Sort Out and Share Points for Solving Issues Toward the Forming of Region Management
Organization by Planning a Training Seminar (II).

—Case of Consultation Workshop in Training Seminar “Let’s Think About Building Regional Organizations”—

YOSHIDA Sho, NAKASO Sayuri, SASADA Keitaro and AONISHI Yasuo

要 旨

近年各地で取り組まれている「地域運営組織づくり」の中では、組織づくりに携わる地域住民や担当者などが地域の中だけで悩むのではなく、地域の枠を越えて課題解決を共有できる場が求められている。本報告では、その場づくりのひとつとして、課題相談ワークショップを提案し、その効果を分析した。課題相談ワークショップは参加者が抱える課題を共有し、お互いの状況を踏まえながらアドバイスを相互に行い、そしてアドバイスを踏まえた今後の意気込みを発表し、共感が多かった発表を研修の成果物としてその場で印刷し、持ち帰るものである。この手法は従来の研修で行われてきたワークショップにおける、問題が一般化してしまうという課題が解決されるとともに、同じ研修の参加者どうしの連帯感の形成なども期待できる。

また、今回の手法は多種多様な課題を抱えた参加者が集まるような場合だけでなく、同じ組織内で多様な事業を分担して進めている場合等にも組織内での課題の発掘と共有、相互コミュニケーションを向上させるための場としても活用できる可能性も示唆された。

キーワード：地域運営組織，組織づくり，ワークショップ，課題の相談と共有，研修

I 本報告の目的と流れ

短報（Ⅰ）では、地域運営組織づくりに関わる先行研究、報告の整理、「みんなで組織づくりを考えよう研修会」（以下地域組織研修会）にて実施したアンケートの分析から、組織づくりに携わる地域住民や担当者などが抱える多様な課題の整理を行った。その結果、地域の主な課

題として「若い世代の参加」、「既存組織との関係」、「事務局の役割」が確認され、また地域づくり関係者間で共有することによって気づきや行動につながる研修となることが示された。

つづく本報告では、問題解決の「場」の手法として「地域組織研修会」の中で企画された「課題相談ワークショ

ップ」(以下、課題相談 WS) のねらいと手法を述べ、その効果の検証と、残された課題について整理を行う。本報告では課題解決手法としての効果についてまとめることで、課題相談 WS の手法が今後の地域運営組織づくりの研修への一助となることを目的とする。

報告の流れとして、第Ⅱ章では地域組織研修会後半の内容として参加者どうしの課題解決の場づくりを企画したプロセスを整理する。続く第Ⅲ章では課題相談 WS の手法についてまとめる。第Ⅳ章においては、課題相談 WS の効果について分析し、第Ⅴ章では成果と課題についてまとめる。

Ⅱ 研修会における課題解決の場の検討

短報(I)では、地域運営組織の立ち上げや運営の中で、地域住民や担当者が抱える悩みや課題は多岐にわたっていることが明らかになった。

この多岐にわたる課題ひとつひとつについて、それぞれ明確な解決策が決まっているわけではない。福嶋(2014)によると、まちづくりはひとつひとつの地域の状況や住民は異なることから、外にある正解を見つけるのではなく、私たちの想いで、私たちが合意をつくり出す必要があると述べている¹⁾。今回の地域組織研修会の参加者も同様に地域運営組織づくりをそれぞれ進めている中で様々な課題を抱えている。筆者らが地域組織研修会を企画するうえでも地域運営組織づくりにおける悩みや課題の解決に向かう手段として、①先行した事例を学ぶ、②他の人の意見を聞き、違う意見を交換し合い自分の考えを客観的にみつめる、という2つの手段が有用ではないかと考えた。①については先行事例発表として研修に含め、②については話し合いを中心としたワークショップを研修内に設けることとした。

研修で実施するワークショップの内容を企画するにあたり、既存のワークショップの手法について整理を行った。従来の地域課題を扱う研修ではワークショップと呼ばれる双方向的な学びと創造を生み出す手法が採り入れられてきた。例としてKJ法²⁾はテーブルを数人で囲み付箋を用いてテーブルごとに意見を集約し課題整理や解決案探しなどに有用な手法である。平井(2017)によるとKJ法の本領が発揮されるのは、付箋どうしのつながりを目に見えるように整理していく段階とされている³⁾。ま

た「ワールドカフェ」というオープンに会話をを行い、他のテーブルの様子も参考にしながら議論を深める手法ももちいられている。この2つの手法は1テーブル1テーマを基本として皆でテーマを深め、それぞれの認識や感覚から物事をとらえることができる。

以上を踏まえたうえで、筆者らは今回の研修で想定される参加者が関わる地域や背景、課題がそれぞれ異なることから、ワークショップの各テーブルでテーマを深めることや付箋どうしをつなげ、形にしていくことは重要ではないと判断した。

以上のことから筆者らは地域運営組織研修の課題解決の場として新たなワークショップの手法を立案し、「組織づくりの〇ヶ条を創ろう」(以下課題相談 WS)として実施した。このワークショップの主なポイントは以下の3つである。①参加者が抱える地域運営組織づくりの課題を共有する。②アドバイスを参加者どうしで交換し合う③各参加者の気づきを模造紙に書き込み共有する。

Ⅲ 課題相談 WS の流れと様子

この章では課題相談 WS の準備と当日の流れについて紹介する。

1. 準備

今回の研修では参加者をテーブルごとに4~5名ずつ割り振った(図1)。参加人数は34名であったため全部で8テーブルを設けた。加えて各テーブルにはタイムキーパーを配置した。タイムキーパーは議論に介入せずに全体の時間の管理と、付箋に記入されなかったキーワードなどの記入の補助を行う。テーブルごとの準備物として模造紙、A4用紙、太いカラーペン、付箋、シールを用意した。



図1 各テーブルの配置

2. 課題相談 WS の流れ

1) ステップ1 課題と概要を書き、テーブルで共有

各自 A4 用紙に半分の折り目を付け、抱えている課題とその概要を書く(写真 1)。課題と概要を書いた用紙をもとに、自分の課題について説明する(写真 2)。ここでは自らが抱える課題を他の参加者へ明確にして共有することを目的とする。発表後は用紙を模造紙の上に置く。



写真 1 課題と概要の記入 写真 2 課題の共有

2) ステップ2 アドバイスタイム

他の人の課題に対して気づきやアドバイスを付箋に書き A4 用紙の周りに付箋を貼りながら説明する(写真 3)。付箋の内容についての質問や提案もざっくばらんに会話をしながら行う。各々の経験や発想を参加者間で共有することを目的とする。



写真 3 アドバイスタイム

3) ステップ3 意気込みの書き込み

アドバイスを踏まえて、自身のこれからの取り組みたいことや意気込みを決め、模造紙に書き込む。課題解決に向けた今後の方針の見える化(文章化)を目的とする(写真 4)。



写真 4 取り組み・意気込みの書き込み

4) ステップ4 他のテーブルの成果の確認

参加者は他のテーブルの課題、アドバイス、今後取り組みたいこと、意気込みを見て回り共感できたものにシールを貼る(写真 5)。他のテーブルの議論を見つめることで、さらなる自分の課題解決やネットワークの構築を得ることを目的とする。

参加者が自分のテーブルから離れている間、タイムキーパーはこのテーブルに残り他のテーブルの参加者からの質問等に対応する。



写真 5 他のテーブルの成果の確認

5) ステップ5 発表と成果品の持ち帰り

テーブルごとに一番共感が多かった参加者が課題、アドバイス、取り組みたいこと、意気込みを発表する(写真 6)。

今回は 8 テーブル設定したため、各テーブルで一番共感を多く得た 8 人の発表を地域組織づくりの九ヶ条のうち八条分として印刷する。最後の一条についてはそれぞれの参加者自身の課題と取り組み、意気込みを書き加えることで九ヶ条とする(図 2)。



写真 6 共感が多かった参加者の発表

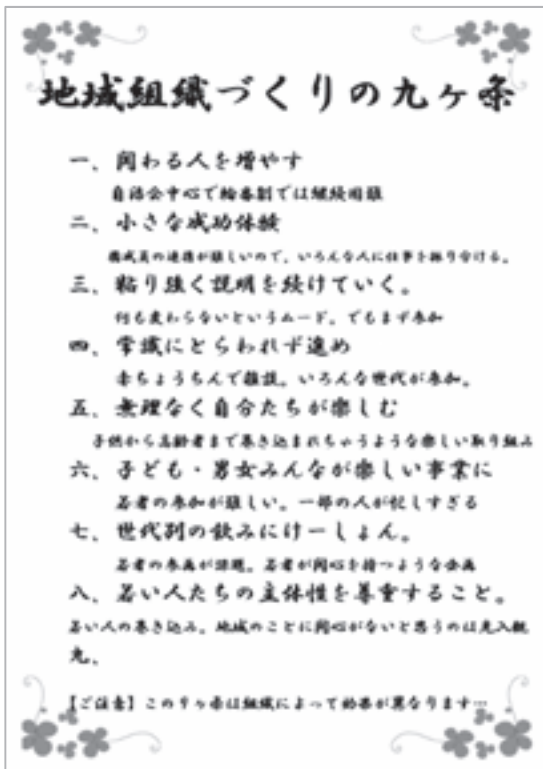


図2 配布した地域組織づくりの九ヶ条

IV 課題相談 WS を通した効果の分析

1. 課題相談 WS 参加者の変容

本章では、課題相談 WS をステップごとに見直すことで、課題相談 WS の効果を分析する。

事例として短報(I)で取り上げた、「若い世代の参加」、「既存組織との関係」、「事務局の負担」の3つの課題を組織づくりの主要な課題として取り上げていた参加者の議論の様子を追跡し、課題相談 WS がどのように機能したのかを検証する。

分析の対象として、研修会参加希望者に行った事前アンケート⁽¹⁾から、組織づくりにおいて抱えている課題について、属性の異なる4名を抽出した(表1)。

表1 研修参加希望者に行った事前アンケート

参加者	所属	地域運営組織づくりにおいて抱えている課題
A氏	集落支援員	若い世代の参加、組織構成の高齢化
B氏	公民館等職員	既存組織との関係、
C氏	集落支援員	事務局の役割、会議の進行
D氏	集落支援員	既存組織との関係

1) A氏(集落支援員)

A氏は、事前アンケートにおいて、「若い世代の参加」、「組織構成員の高齢化」が課題であると回答していた。

課題相談 WS のステップ1において、「**若者の参画**」を課題として提起し、その理由を、「組織設立時にメンバーとして入っていなかったため、理解してもらえていない」と記しており、組織の設立時に若者の関わりが必要であったと感じている様子がうかがえた。

ステップ2では、この課題提起に対してグループ内の参加者から、「若者の参加を促すための交流、憩いの場づくりからはじめてみては? (お金を渡して視察に行ってもらおう)」、「違う視点から若者を取り込む(具体例、町全体のことではなく小さな取組み)」、「世代別のカフェ、飲み会、夜カフェ、昼カフェ」というアドバイスを付箋で提供されている。

その後のグループトークを踏まえ、ステップ3のA氏自身の意気込み(気づき)には、「**テーマをしぼって世代別の(男女別)の飲みにけーしょん**」と記されており、付箋の言葉やグループ内での話し合いにより、これまで自分が思いつかなかった考えや取組みに気づけたようである。

研修会終了後のアンケートでは、課題相談 WS について、「非常に有意義であった」と評価し、自由記載欄には、「一人では思いつかない様々な角度からアドバイスいただきとってもよかったです。帰ってすぐに実践したいと思います」と記されており、地域での実践活動をイメージできたと考えられる。

2) B氏(公民館等職員)

B氏は、事前アンケートにおいて、「既存組織との関係」「自治会(区・集落など)との関係」が課題であると回答していた。

ステップ1において、課題を「**コミュニティ活動を推進するために多くの人をまき込む伝え方**」、その理由を、「**団体の代表が代表という意識が低く個人として活動しているようだ**」と記し、組織づくりを進める際に既存団体の代表への伝え方(働きかけ)が難しいと感じている様子がうかがえた。

ステップ2では、この課題提起に対してグループ内の

参加者から、「役割を分散させて多くの人を巻き込む」、「団体から複数人出してもらおう」、「新しい人を入れる仕組み、次の人をどう作るか→生きがいでしているので難しい」というアドバイスを付箋で提供されている。

その後のグルーptークを踏まえ、ステップ3のB氏自身の意気込み(気づき)には、「**楽しく！！役員で研修する！！**」と記されており、付箋の言葉やグループ内での話し合いから、今後地域で研修会を開催して役員らと楽しく学び合う中から得られる「気づき」も多くの人を巻き込む伝え方の一つになることに気づいたようである。

研修会終了後のアンケートでは、課題相談WSについて、「非常に有意義であった」と評価し、自由記載欄には、「いろんな人の意見が聞いて良かった、意識の高い方が多くて刺激になった」と記されており、受けた刺激をしっかり受け止め、地域への働きかけに向けたイメージができたと考えられる。

3) C氏(集落支援員)

C氏は、事前アンケートにおいて、「事務局の役割」「会議の進行」を課題であると回答していた。

ステップ1において、課題を「**はなせない**」、その理由を、「話せない、離せない(事業の取捨選択)、放せない(一人で抱え込む、求められずにいる)」と記し、話し合いの持ち方や業務を抱え込み、離せなくなっている状況を明らかにしたいという気持ちを課題としてあげていた。

ステップ2では、この課題提起に対してグループ内の参加者から、「忍耐」「参加型に」「雰囲気づくり(アットホーム)」「無理をしないようにしてもらおう」というアドバイスを付箋で提供されている。

その後のグルーptークを踏まえ、ステップ3のC氏自身の意気込み(気づき)には、「**待つーみんなで育つー**」と記されており、付箋の言葉やグループ内での話し合いにより、事務局業務の改善には組織内での時間をかけた話し合いと、役割の分担(責任の分散)を図ることが必要であることに気づいたようだ。

研修会終了後のアンケートでは、課題相談WSについて、「非常に有意義であった」と評価し、自由記載欄にも、「シールを使って全てのテーブルがまわられてよかった」と記しており、テーブル内での話し合いによる気づきと、他のテーブルを見て類似する課題にも共感できたと考え

られる。

4) D氏(集落支援員)

D氏は、事前アンケートにおいて、「既存組織との関係」が課題であると回答していた。

ステップ1において、課題を「**組織のリーダー探し**」、その理由を、「**事業の運営も主導して下さる方**」と記し、組織づくりでリーダーシップを発揮できる人を見つけたという課題をあげていた。

ステップ2では、この課題提起に対してグループ内の参加者から、「高齢者クラブ、体育協会」「子供会、PTA、小・中・高、専門学校、青少年協議会、町内会長」「自分が話しやすい人から一人ずつ増やしていけば」というアドバイスを付箋で提供されている。

ステップ3のD氏自身の意気込み(気づき)には、「**組織づくりにおいて、皆さん共通の課題があり安心!**」と記されており、今回の研修目的と合致していた。

ただし、研修会終了後のアンケートでは、課題相談WSについて「やや物足りなかった」と評価し、自由記載欄には、「課題に対し、具体的に解決にあたる内容はありませんでした。出てくる意見は予見できる内容であり、ワークショップに再考が必要と思います」と記されていたことから、課題相談WSの効果は低かった。

2. 考察

課題相談WSでは、研修会参加者が現在抱えている地域運営組織づくりの課題とその理由をテーブルの参加者に対して語る際に、相手から頷きと相づちをもらう場面が数多く確認され、話し相手が自分の話を「聞いてもらっている」という、より話しやすい状況が作り出されると考えられる。また、テーブルの参加者の構成として、立場や地域の状況が類似していれば議論が深まり、異なれば議論の広がりを感じられ、そこへアドバイスの付箋が提供されることにより、これまでの自分にはなかった新たな考えに気づき、課題の解決に向けて前向きな気持ちになれる効果が期待できる。

ステップ4では、他のテーブルの議論を見ることで類似する課題に対して共感し、解決に向けたアイデアを共有できるうえ、共感した議論に対しては付箋で意思表示を行い、その付箋の多さから参加者に共感された議論が一目で分かるような工夫をしている。また、それぞれ

のテーブルから集まったアイデアから作成される「九ヶ条」においては、8つは各テーブルのまとめを記し、残りの1つに参加者が考えたアイデアを加えた自分のものとして持ち帰ることから、今後地域運営組織づくりにおいて不安を感じたときに読み返すなどの効果が発揮されるものと期待できる。

今回の研修会後にアンケートを実施し、参加者46人中32人より回答を得たうちの94%が「非常に有意義であった」あるいは、「有意義であった」と回答し(図3)自由記載欄には複数の参加者が「想いの共有ができてよかった」と記していることから、ほぼ全ての参加者に学びが得られる効果が見られた。また、「最後のお土産(九ヶ条)にも驚きました。ありがとうございました」と成果物に喜ぶ参加者もいた。

以上のことから、課題相談WSは参加者ひとりひとりが自ら抱える地域の課題を語りそこにテーブルの参加者からのアドバイスの提供を受け、そこから新しい考えにたどりつくという、今後も地域運営組織づくりを推進するうえで必要となる意識の向上や、考え方の磨き合いの時間を提供する場となったと考えられる。

一方で、やや物足りなかったと回答する参加者も3%おり(図3)、アンケートの結果を踏まえ今後さらに課題相談WSの質の向上を考えていく必要がある。

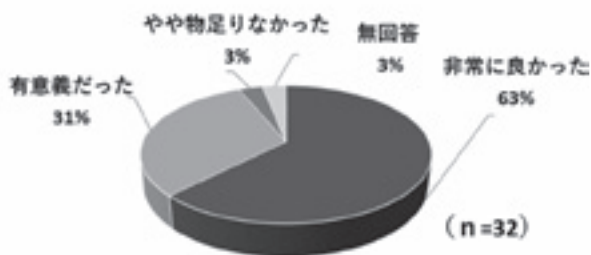


図3 ワークショップの満足度

V まとめと今後の課題

本報告では近年、中山間地域の各地が課題として取り組んでいる「地域運営組織づくり」をテーマとして扱った研修会を通して、多様な地域が参加する場合におけるWSの課題について分析し、改善策を設計し実行したものの

の効果と課題を整理しまとめた。IV章でも述べたようにこのWSは各自が抱えている課題を「聞いてもらっている」という状況を作り出し、テーブルの中でひとりひとりが抱える課題にしっかりと向き合うので、信頼関係が高まり、アドバイスの効果が向上することが期待できる。

今後の課題としては、①成果物の活用、②参加者の気づきをより豊かにする、③各参加者が抱える課題のうちひとつだけしか相談することができない、の3つが挙げられる。①については、例えば掲示が促されるようにポスターとして印刷するなど、ステップ5で作成した〇ヶ条(今回の研修では九ヶ条)を研修が終わった後も十分に活用できるような仕組みをつくれれば、より研修の効果も大きくなると思われる。②については、課題相談WSではテーブル単位で話し合いを進めてきたが、途中で他テーブルの参加者と入れ替えたうえで、課題の共有と参加者どうしのアドバイスタイムを繰り返すなどの工夫することで、より豊かな気づきにつながるのではなかろうか。③については、相談が複数にわたる場合には、課題相談WSを繰り返すなどの対策が考えられる。

最後に、この手法は今回の研修のように多種多様な課題を抱えた参加者が集まるような場合だけでなく、同じ組織内で多様な事業を分担して進めている場合等にも組織内での課題の発掘と共有、相互コミュニケーションを向上させるための場としても活用できると考える。

引用文献

- 1) 平井太郎(2017) ふだん着の地域づくりワークショップ(JC総研ブックレットのNo.21). 筑波書房.
- 2) 川喜多二郎(1986) KJ法. 中央公論社.
- 3) 福嶋浩彦(2014) 市民自治 みんなの意思で行政を動かす自らの手で地域をつくる. ディスカヴァー・トゥエンティワン.

注

[1] 笹田敬太郎, 青西靖夫, 吉田翔, 中曾さゆり(2018) 研修課の企画運営を通じた地域運営組織づくりへ向けた課題解決のためのポイント整理・共有の取り組み(I). 島根中山間セ研報14(印刷中)を参照のこと。